



○1937(昭和12)年7月7日は、盧溝橋(ろこうきょう)事件で日中戦争開始の日です。

- 北京郊外の盧溝橋は、全長266.5m。欄干には大小485頭の獅子の石刻が施され、マルコ・ポーロが『東方見聞録』で、世界で最も美しい橋と讃えた。
- 盧溝橋付近で今から76年前、演習中の日本軍兵士1名が行方不明になったことから日本軍が攻撃し、本格的な戦争に拡大する。日本軍の謀略でした。
- 今、日中関係が悪化し、戦争の史跡を訪ねる日本人が少なくなっています。

盧溝橋の獅子

私の戦争体験 3. 11東日本大震災・原発事故の体験 29

ヒロシマで「黒い雨」にうたれ、原発事故で再び被災

南相馬市小高区(神奈川県相模原市に避難)・遠藤昌弘さん(88歳)



私は大正14年福島市生まれで、今年88歳。父が警察官で小高町(現・南相馬市小高区)に移り、小高小学校を卒業。大阪のおじのお世話で関西工業学校に入学しました。そして、終戦前の当時最後となった兵隊検査で第二乙種合格となり、小高に帰って待機していました。

広島で陸軍病院で被爆

昭和20年1月初め、20歳だった私は本隊が中国の下城子(かじょうし)の満州第2016部隊に、現役入隊しました。大阪から満州に渡りましたが、戦況悪化のためか、すぐ4月頃に日本に帰り、九州の宮崎県の佐土原というところの部隊に駐屯しました。そこで銃砲連隊に配属されますが、胃を病んでいて鼻血が出て病院を回され、4つ目の病院として広島の第二陸軍病院に転送され、そこで運命的な被爆を体験することになります。

原爆投下の16日前の7月21日、広島に転送され、市内の北西部、横川駅の近くの三滝分院(爆心地から北2.5キロメートル)に入院しました。木造平屋建てで十数棟の長い病棟が南北に並んでいました。広島は空襲もなく、比較的静かな町でした。

8月6日、原爆投下の日ですが、午前5時ごろ空襲警報が出て、やがて警戒警報に変わり、それも解除になって朝食の時間になっていました。その日、私は前の晩から頭痛がひどく、作業に出ないで病棟に残っていました。同室には、支那事変で片腕をなくしていた一等兵、それに老人兵など4人がいました。

その時 時間が止まったようでした

原爆投下の午前8時15分のその時刻、私はベットで眠っていました。突然、「空襲だ」という片腕の一等兵の叫び声で目を覚ましました。

その一等兵は南側のベットに寝ていて、私は最下位の二等兵でしたから、北側の廊下側に寝ていました。その一等兵が廊下へ逃げる音がしました。とっさに私も廊下に出て逃げようと扉のレールを踏みつけました。その時のレールの冷たさが今でもこの足裏に残っているように、その瞬間のことをよく覚えています。時間が止まったかのように感じました。片腕の一等兵の廊下のむこうに走って行ったのも覚えていません。

爆風で廊下の壁に吹き飛ばされる

でもすぐに、「軍服、靴、戦闘帽は必ず持って逃げなければ」とひょっと考え、取りに戻ろうと部屋に入ったか入らない一瞬のことでした。霧でも吹きつけられたような爆風で、私は廊下の壁に吹き飛ばされました。それに朝でしたから南の空に光るものなんかないはずなのに、南のほうに閃光を感じたような気もしました。でも、私のベットは壁のかけになっていて、直接閃光は当たらなかったためか、私は幸い火傷はしていませんでした。同じ部屋の中で他に火傷をした人もいました。音は全く私は聞いていません。

病棟は真っ直ぐ上から押しつぶされたようになっただけで破壊されました。私は廊下のところで頭を手で押さえて立っていると、屋根のスレート瓦が雨のように落ちてきて、たちまち足のところにたまって足が動けなくなったほどで、その時の傷は今でも両足に残っています。病棟のそばの防空壕に逃げ込みました。実に不気味なくらい静かだったように覚えています。

その後、警急集合所に集まりましたが、その時初めて自分が眼鏡を失くしていることに気づきました。集合所には兵隊の患者だけでなく、民間の人々もたくさん助けを求めて来ていました。気が動転していて、煙を見て飛行機だと叫んでいる人もいましたし、皆ひどい傷を負っていました。太陽が煙で黒い紫色だったことも鮮明に覚えています。原爆投下から20分ほど後のことだと思います。(裏面に続く)

○劇団俳優座(東京・六本木TEL03-3405-4743)では、8月2日(金)～4日(日)「戦争とは2013 朗読会」を公演します。この「遠藤昌弘さんの被爆体験」を神山寛さんが、若松丈太郎さんの詩を清水良英さんが、石川逸子さんの詩を有馬理恵さんと関口晴雄さんが朗読します。

(表の紙面より)

「黒い雨」に茫然とうたれて

また、山の防空壕へ逃げろという命令で山に向かいましたが、山は燃えていて行ける状態ではなく、あちらこちらを一時間ぐらいいさまよいました。その時、パラパラという音とともに雨が降ってきました。いわゆる「黒い雨」でタ立のようでした。あちこちでドラムカンが爆発する音がバンバンと聞こえました。私も他の人も白衣は血で真赤で、そこで初めて自分のケガのひどさに気がつきました。落下したスレート瓦で頭からもかなりの出血、両足も手の甲にも無数の傷ができていました。隣の兵士は耳がなくなっていました。私たちは「黒い雨」にうたれながら茫然としていました。ああいう時、一旦自分のケガなどに気がつくともう動けなくなるものですね。

軍人は優先的に薬品を使用

病院にもどり、防空壕で終戦の日の朝までいました。私たちは一応兵隊で軍人ということで、優先的に薬品を使うことができましたが、助けを求めてきた民間の一般市民たちは本当に惨めでした。ろくな治療もしてもらえず、精も根も尽き果てて死んでいく人も多かった。赤ちゃんだけが生き残り、死んだお母さんの乳房をしゃぶっていたり、いろいろなひどい場面を目撃しています。次々に死んでいく人も実に多く、それを衛生兵が焼いていきました。

8月15日「本日正午、重大放送あり」

8月15日の終戦の日、私たちは第二陸軍病院三滝分院から横川駅まで歩きました。その途中、電柱に「本日正午、重大放送あり」というはり紙を何度も見て、「何の放送なんだろう」と考えたりしました。横川駅から汽車に乗り、広島駅を通過して芸備線の3、4つ目の山の中の駅に降ろされました。駅名は忘れしました。山の中の小学校の講堂に転送、つまり避難したわけです。そこで初めて、青い謄写インクの印刷物で日本の敗戦、終戦を知りました。

脱毛、下痢など原爆症に苦しむ

8月下旬に宮崎の佐土原にまた戻りましたが、脱毛が起こり肝臓を悪くし、また体一杯にブツブツができて化膿して破れたり、下痢もひどかった。こうした原爆の後遺症は50歳過ぎまで続き、本当に苦しみました。10月20日ようやく武装解除となり、両親のいるこの小高町に帰り、その後、大阪のおじの建築事務所の手伝いをして、昭和25年、父の死亡で小高町に戻り、29年5月から小高町役場に就職し、停年退職まで勤務しました。

これまで私は一度も広島には行っていません。いろいろな思い出しますから、行きたくありません。「被爆者健康手帳」は、広島市の被爆から60年後の平成17年に交付していただきました。

＜ここまでは1983年5月の聞き取りしたもので、2007年7月の本会報№30にも掲載しました。遠藤さんは、お名前もお写真もずっと公表されておられます。＞

《それから65年後》 よもやの震災・原発事故 再び放射能に追われるとは

戦後は、小高町役場職員として土木課に勤務し、73年に町が誘致を決めた「東北電力浪江・小高原発」建設予定地の取り付け道路の用地買収なども担当しました。私は被爆者でしたが、「原発は原爆と違って平和産業、原子力の平和利用だ」と確信して交渉にあたりました。(道路は完成したが、今年2013年3月この原発建設は中止となりました。)

そして65年後の2011年3月11日、東日本大震災が起き、さらに福島第一原発の事故で放射能を怖れ2年4ヶ月の避難生活を送ることになります。

3月12日午後 水素爆発が起きて

自宅は地震と津波の被害はありませんでしたが、福島第一原発から北に17^{km}地点にあり、3月12日水素爆発が起き、立ち入り禁止の「警戒区域」に指定され20^{km}圏外に逃げよと言われます。妻の幸子(84歳)と長女と3人で親類の車に飛び乗り、10^{km}北の原町区の石神中学校体育館に逃げました。手元には自宅の鍵、財布、健康保険証、被爆者手帳だけで、着の身着のままの避難でした。雪も降り、本当に寒い三晩を石神体育館で過ごした後、福島市の親類宅に3日間、さらに長女の知人宅の神奈川県相模原市に避難します。福島から遠く、「まさか2度も、放射線におびえることになるとは。本当に腹立たしい」、そんな怒りと不安の避難でした。

目に見えぬものに逐われて春寒し

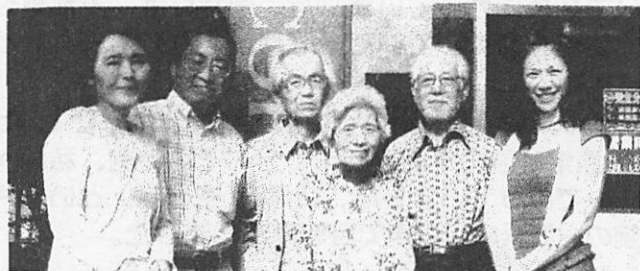
これは避難中に私が詠んだ俳句です。

裏切られた「原発は安全」

私は「浪江・小高原子力発電所」建設予定地の道路の用地買収に関わり、「私は被爆者だから放射能の怖さをよく知っています。原発と原爆は違います。安全です。原発は平和産業、雇用をつくる地場産業です。」と、そう信じて話していたことが悔しく、じくじたる思いがあります。「原発は安全」ではなかったし、私たちは裏切られたのです。

今私は、「福島若き人に、私たち被爆者と同じ苦しみを味わわせたくない。長期的に健康不安を取り除く手立てを講じてほしい」と切望しています。

＜2013年6月28日聞き取り、文責：事務局 山崎＞



右の写真は6月28日、遠藤さん(中央)とご家族に、劇団俳優座の神山寛さん(右から2人目)、有馬理恵さん(右端)とともに、お話をうかがった時のものです。(遠藤さんの避難先、相模原市中央林間駅前)